『比較日本文化学研究』第 11 号（2018）

論　文

石森延男の小説「咲きだす少年群」における「五族協和」について

郭　　璇
広島大学文学研究科博士課程後期

Concord between five ethnic groups in Nobuo Yishimori's *The Wind of Mongolia*

GUO Xuan

Abstract: "Concord between five ethnic groups" was a founding ideal of Manchukuo(which is called the Puppet State of Manchukuo by Chinese), the puppet state established by the Japanese in China in 1932. The five ethnic groups refer to the Manchu, Japanese, Mongolian, Han, and Korean nationalities. The principle of concord between five ethnic groups aimed to build a world of peaceful coexistence and harmony among all ethnic groups. Under the banner of this founding value, the Japanese imperialist rulers enforced a policy of discrimination among different ethnic groups. The puppet state of Manchuria subjected the rulers and the ordinary people to an unequal and hypocritical regime under the dominion of the Japanese colonialists. However, this ideal, which was believed by many people, also became the background for several literary works. A representative work based on this ideal was by Nobuo Yishimori, who was one of the major authors of the Manchurian children's literature. In his fairy tale, *The Wind of Mongolia*, Nobuo Yishimori described the concept of concord between five ethnic groups as a personal ideal in his depiction of an ideal society of coexisting prosperity, mutual help, and no ethnic differences. However, in his description of the goodwill between the Japanese and the Manchu, he stressed an image of the Japanese as savior, which unconsciously glamorized the Japanese. Therefore, he was fundamentally unable to avoid the feeling of superiority of the Japanese as the dominator.

Keywords: Concord between five ethnic groups, Manchurian children's literature, Manchukuo, Hypocritical regime

1 はじめに

「五族協和」は日本人が傀儡政権の満洲国を建国した時の理念であった。1932年の満洲国成立にあたっては、「順天安民・王道楽土・五族協和・門戸開放」という「建国宣言」が高らかに謳い上げられた。そのような背景の下、この建国理念に記銘され、各民族が共栄共存することを願う人々が当時多くいた。紛れもなく文学界でもこのような願いを作品の中に入れ、自分の理想と抱負と共に実現しようとする文学者たちが少なくなかった。石森延男の「咲きだす少年群」はまさにその代表的な作品と言える。

石森延男と言えば、同時代の日本人によく知られているのはアイヌの話「コタンの口笛」であったが、彼は満洲で教育者兼文学者として活躍していた。彼と満洲との繋がりは、1926年に南満洲教科書編集部に命ぜられ、在満日本人学校の国語教科書副読本『満洲補充読本』の編集に従事したことに遡る。1932年に編纂を退任した後は、大連民政局地方課視学を経て、大連弥生高等女学校教員となった。1939年に帰国するまでの13年間を満洲で過ごした。教科書編纂のかたわら、石森は自費を拠出しながら子どもたちのために文学創作活動に努めていた。『満洲野』『童心行』など多くの雑誌を発刊し、満洲児童文学の発展に大きな役割を果たした。満洲児童文学第一人者とも称されている。

彼が創作した作品は、在満日本人の子どもたちに満洲を紹介することを主眼としているため、当然満洲に関するものが多い。本稿で取り上げた『咲きだす少年群』は、彼が満洲を背景として、満洲の子どもたちの生活を描く最初の長編小説で、満洲に住む人々だけでなく、当時の日本人にも広い影響を与えたもので、石森の出世作と評価されている。

筆者が、「咲きだす少年群」を「代表作品」として取り上げる理由は、建国理念を反映している数多くの満洲文学の中、荒削りな貧弱地としての児童文学が抜きんでるという点、そして作品の設定や内容において、「五族協和」の理念を含めた当時の満洲像を再現している点の二つの点である。故に本稿では、「咲きだす少年群」を取り上げ、「五族協和」を着眼点とし、真実の「五族協和」の社会状況を踏まえた上で、小説の中に体現する「五族協和」を考察してみる。

2 「五族協和」について

「五族」は、満洲人・日本人・漢人・蒙古人・朝鮮人のことを指している。「五族協和」とは、満・日・漢・蒙・朝の五つの民族が協力し、平和な国造り

を行うとする主旨のものである。

このスローガンは、本来、孫文による中華民国の成立の際の建国理念であった。その後、漢民族、蔵族、ウイグル族、回族を指し、多民族国家としての「中国」を表現するスローガンとなり、各民族の共存共栄による「共和」制を念頭に置くものに発展した。満洲国の「五族協和」はこれを換骨奪胎したもので、共和制（共和国）のイメージのある「共和」を「協和」に変えたものである。満洲には、五族と、前述した少数民族の他、白系ロシア人や、ユダヤ人やアルメニア人などの外来民族も居住していた[1]。

1933年から1940年にかけての各民族別の割合によると、全体の9割以上を「満人」が占めている[2]。しかし、それにもかかわらず、満人が統治機構を占める比率は非常に少なかった。1934年から1940年まで6年間に、中央政府機関の日本人比率は53%から69%になっている。満洲国の官吏らは、地方自治の発展、民族協和などの主張を挙げて王道楽土を叫んでいたが、実権を握る関東軍に王道楽土を目指す考えはなかったである[3]。川村湊は、実際の満洲国の状況が、「民族協和」のスローガンを提唱しながら、本質的には「決して対等な関係にある五族間の協和ということではなく」「指導民族としての日本民族の下で、他の四つの民族が平等に共存共栄する」[4]というものであったことを指摘している。つまり、「五族協和」という宣言はただ鏡に映った花にほかならなかった。

3 「咲きだす少年群」の概略

「咲きだす少年群」の原作は、「モンクーフォン」という題目の新聞小説で、満鉄機関紙『満洲日々新聞』に40回（1939年3月14日～5月3日）にわたり連載されていたものであった。1939年に新潮社から単行本として改題し出版された「咲きだす少年群」は、尾崎士郎に激賞され、第三回新潮文芸賞を受賞した。

その創作背景としては、満洲日々新聞社から、「満洲の子供を主題としたものをかいてほしい」[5]と頼まれたことがある。「満洲で育てられてきた異民族の子供たち一緒になって、自然に憧し、なじみ、恐れ、疑い、争い、親しみあい、思い思いの動き方について」[6]書かれたものと、単行本の「はしがき」に記載している。

物語は、洋を中心に、洋の姉の麻子、その婚約者（夫）の啓二らの日本人

や、貧しい母子家庭の兄妹志泰と桂英らの満人とを物語全体を貫く関係とし、ロシア人の少年ユリヒーや、蒙古人の少年チャクト、洋のクラスの担任の先生である南先生の話を、物語の途上で発生する断片的な話として登場させている。

4 作品における「五族協和」

4.1 五族協和の体現①－各民族の子ども

前述した通り、主人公の子どもたちは、大連の小学校に通う日本人少年の洋、同じ学校の同級生である蒙古人のチャクト、ロシア人のユリヒー、そして満人の小学校に通っている貧しい母子家庭の兄妹志泰と桂英である。

前節で述べた「五族」は満日漢蒙朝のはずだったが、この小説に朝鮮族の代わりにロシア人が入った。このようにして、日・満・蒙・露の仕組みが出来上がっている。ロシア人は石森の他の作品の中にも頻繁的に出ていて、それは、石森が当時住んでいる大連で、様々なロシア人も暮らしていたため、彼にとって、ロシア人は満洲の人の中に重要な存在あったからであると推測される。

次に、それぞれの登場人物の詳しい設定を押さえておこう。日本人の少年の洋と、友達の真の父親は、いずれも満鉄建設に関わる仕事を従事している。塚瀬進の『満洲の日本人』によると、当時の満鉄の社員は、「在満日本人の半分近くを占めており」[7]、「満鉄で大学卒、主として東大、京大の卒業生を職員に正式採用していた」[8]。

中国人の兄弟の志泰と桂英は、父親が行方不明となり、母親も病気で亡くなり、貧乏な孤児になってしまったという設定である。志泰は、幼い妹と病気の母を世話する傍ら、生計のために鶏の卵を売っていた。このように、貧しいが逞しくて自立的な満人の子どものイメージが作り出された。

ロシアの子どものユリヒーはもてなし好きである。ユリヒーが洋と真ちゃんを自分の家に招く節がある。ユリヒーの妹のソーニャが「蓄音機をかけていっしょにうたっている」[9]ところや、父親の吹くトロイカの曲に合わせ、母親とソーニャが歌うところから、一家団欒の、ロシア文化の趣味が充分に表れている。自分の民族の固有文化を保つという民族イメージを付けた。

蒙古人の少年チャクトは、蒙疆政府の役人である父親の望みによって、日本人学校に編入し、日本的な教育を受けている。雪合戦で洋を助けたこと、

また体操の時間の騎馬戦で負けた時、人目もはばからず「火のついたようにおんおんと泣き出した」[10] ことなどから、チャクトは蒙古族の直情的で正義感が強いというイメージをまさしく体現している。また、チャクトが蒙古の学校で日本語を教えるために大連を去ることになり、駅でクラスの皆の見送りを受ける場面も描かれている。これは当時の日蒙間の関係を示している。満洲国の成立とともに、内蒙古東部の蒙旗地方も満洲国に帰属した。その際、日本語とモンゴル語が国語と定められ、必修科目になったため、日本語教師が必要となっていた[11]。こうした経緯を考え合わせると、チャクトという人物の設定は民族像の代表だけでなく、別の意味を加えている。寺前君子も、石森は「少年チャクトの姿と、蒙古人チャクトが背負う民族の社会的・政治的一面をも同時に描こうとした」[12] と評価している。

これらの主人公の子どもたちの身分や関係の設定は、典型的な民族の性格を体現している同時に当時の民族関係を示している。これらの設定と現実の満洲人口の状況を対照することによって、身分の設定は当時の状況に合致していることが分かる。これは、石森が満洲で 13 年間暮らしており、周りの満洲に住む人の事情について非常に詳しく緻密な観察があったからであろう。このように異なった国から来て、文化背景が完全に違った各民族が満洲という同じ土地に集まり、協和して暮らせる舞台を作り上げている。

4.2　民族協和の体現②－民族を越えた友情

物語が洋の家庭と学校での生活を中心に展開しているので、洋と各民族の子どもたちの間の友情は全小説の基調を定めている。彼らが放課後や、春節などの祝日に、一緒に遊んだりお互いに学んだりしているシーンは断片化されて、物語の中にあちこちで織られている。例えば、石森が力点を置いて描いた、雪投げのシーンがある。

洋の小学校の戸外運動場にあった出来事である。洋の組の者が二手に分かれて雪投げしていたのだが、この中に入ろうとした洋は、どちら側からも排斥されてしまう。洋は、両方を相手に闘うが、結局、皆の標的になり、雪の中に押し倒され、みんなが洋の上に馬乗りになった。この時の洋を助けたのはチャクトの登場である。

チャクトは、洋の手をひっぱって、からだを起した。洋の顔が雪にうずもれていたので、そこには、洋の顔の形が、そっくり雪にきざまれている。

「洋くん、ほら、きみの顔が、ここにもう一つあるよ。」

チャクトは、そんなことをいって洋を元気づけた。

いま、チャクトにすくわれなかったら、洋はどんなめにあったかしれない。チャクトにひっぱられている手を、洋はだまって、強くにぎった。[13]

これは、同じ学校に通学する洋とチャクトの初対面の記述である。二人の友情はこれから始まり、展開したのである。満洲の土地で自分と同じ民族の子どもたちにいじめられ、かえって全く知らない他の民族の子どもに助けられたシーンである。

自分の民族を貶めることによって、他民族の温情を際立たせるという設定は、「民族協和」の主題を突出する創作意図が露見化しすぎて、大仰ではないかと思われるが、全体を読むと、遊ぶシーンの他、志泰と桂英兄妹の母親が病重になった時、洋と姉の麻子が全力で助けるといった、様々な友情を表現するシーンがある。意識的に民族協和の構図を作ったことというより、むしろ、石森にとって、満洲は、異郷や異国というイメージがなく、分けることのできない全体として存在すべきであった。その中にある子どもの友情は、民族の差別の意識のない、民族や人種を越えたものであっただろう。

4.3　民族協和の体現③－平和への願い

作品中の舞台は石森が暮らしていた大連である。描かれる時代は1937年7月の盧溝橋事件によって、戦火が中国全土に拡大し、日本国内では「国家総動員法」が実行され、国を挙げて戦時体制が強化され、やがて太平洋戦争へと突入する、という設定であった。

この舞台で、戦争の話は主人公の日常生活の一コマとして織られている。麻子の婚約者は一年前に戦死している。洋がラジオのスイッチを入れると、ラジオから「タタタタタ……機関銃の音がとびだしてくる」[14]。麻子が友人と舗道を歩いている時、「爆撃機が、三台ならんで、D郵便局のま上を通過していく」[15]。

南先生が兄の出征の電報を開けた際、姉の保子とこのような対話があった。

「あら、一郎にいさんの出征」

中略

「へいたいさん？」

「すると、兄きは、軍医として出征するのかな。それとも輜重兵（食糧や武器などをはこぶ兵）かな。まあ、どっちでもいい。いよいよ兄きの番になったか。」

「すると家は、どうなりましょうね。心配はないと書いてあるけれども。」

「父と母とねえさんと、残るわけね。」[16]

二人の対話から、南先生の普段の理性的で落ち着いたイメージが一転し、言うことが支離滅裂になったと感じられる。もちろん自分の兄の出征の知らせを見た時、南先生が一番心掛けているのは、兄の命の安全で、故にまず前線の兵であるかどうかという心配の気持ちが思わず口をついて出た。その後、兄の番になったことが信じられず、この突然の知らせを一時的に受け入れられなくなり、もう一度聞いた。保子もすぐに家族のことを心配し、二人の会話の内容はまた家族の問題に陥っていく。ここでは兄の出征によって家族のことが不安をよんでいる雰囲気が潜んでいる。

戦争の話は、ただ登場人物の日常生活の一コマとして描かれた。小説にある子どもたちは日常的に登校したり、一緒に遊んだりして、のんびりと暮らしている。しかし、その緊迫感の無いように見える日常生活は、じっくり読むと、頻繁に戦争の影に包まれている。

前川康男（1972）は、『咲きだす少年群』を「反戦小説」と評価している。その根拠として、『石森延男児童文学全集』の巻末にある、石森の以下のような記述を挙げている。「子どもたちが、こうしてみんなうちとけて、なんのこだわりもなく手をつないで、なかよくくらしているのに、どうしておとなたちは、こんな戦争みたいなものをおっぱじめるのだろう。いったいなんのために、いま、ここでやらねばならないのか。……ひとにぎりの人によって、日本人がふりまわされていることに、大きな不安を感じた。不安よりもいきどおりを感じた。『モンクーフォン』を書いたわたしの気持ちの中には、こうした感情があった」。この記述について、前川は、「決して、命や生活の危険のない今、戦中の作品を飾ろうとすることばでもなく、戦後の弁解でもありません。この物語には、どうしようもない若い人たちの不安といかりが、ひそかに籠められている」「作者の、ひそかな時流に対する抵抗を感じます」[17] と解読している。

4.4 民族協和の体現④ー差別ない世界への相互学習

作品の中で、各民族の子どもは、いずれも優れた点を持っている。例えば、中国人の子どものすぐれた点に関する描写として、「忍耐強いし、辛抱強い」「粗食のくせに、からだも大きいし、虫歯なんて、ほとんどない」「満洲のクーリーなんかもすばらしい力持ちだよ。あの豆かす板ね、あれを八枚から十枚をひとりで背おうのがいるんだからな。一枚たしか、七貫（約二十六キロ）ぐらいある」[18] などといったものがある。ロシア人の子どもについても、「生活がひじょうに規則的に訓練されているし、ま冬なんかも、必ず外を散歩してきたえられている」と描かれている。これに対して、石森は日本人の子どもが多民族を学ぶべきだと建設的な意見を述べた。このように、各民族がお互いの優れた点を学びながら、弱点を改善するという提議のような言葉が、全小説の中に満ちている。

もう一つの例として、このような場面がある。志泰の母親が倒れ、洋がその事情を志泰の代わりに満人小学校へ知らせに行くと、満人の女の子が日本語で受け応えした。そのとき洋は、「あんな小さな満人の女の子に負けたようで」、「満州に住んでいて、満州人と話ができないなんて、ほんとうにはずかしいことだ。ふだんシナ語の時間に、シナ語をばかにして、ただおうむがえしに、口まねだけしていたから、こんなはじをかくんだ」[19] と自省している。

これは石森自身の反省であろう。満洲における各民族の子どもたちは、皆日本語で交流している。つまり、日本人以外は、いずれも複数の民族の言語をマスターしているということになる。中には、数カ国の言語を話せる中国人の少年もいる。しかし、日本の子どもは日本語しか話せない。これは日本人にとって恥ずかしいことであると石森は考えたのである。

こうした点に関連して森かをるは、＜日本語＞を軸に『咲きだす少年群』を解読している。すなわち森は、「洋のまわりには多くの子どもたちがいるが、その世界は＜日本語＞のみが流通する世界なのである」[20] としたうえで、日本語は「支配者日本人の国語であり、支那人にとっては、日本との＜同一性＞として押しつけられる外国語」[21] であるとして、ここに文化支配の構図が認められることを指摘している。

ここで、当時の社会事情を押さえておこう。1937 年 5 月に満洲における新学制が公布された。満洲国の国語は漢語、モンゴル語、日本語の三つで、日本語が第一国語の資格を持つと決められたため、人口比率では 5%に達しな

い日本人の言語が、第一国語の位置を占めた[22]。このように、確かに在満日本人の子どもたちは、「支那語」が話せなくても、生活には支障がない世界で暮らしている。そのため、満洲の言語状況についての描写は、石森の意識的構図ではなく、世相をそのまま反映したものではないかと思われる。前述のとおり、石森は各民族がお互いの文化を学び合う、差別のない世界を理想としていたと見られるため、文化支配を意図した描写は考えにくい。洋の口を借りて、在満日本人の子どもの「支那語」の習熟状況を批判する態度も、その有力な論拠となりうる。

5　作品における「五族協和」の体現効果

以上みてきたとおり、それぞれ鮮明な民族の特性を持っている、文化の背景が異なった少年たちは、満洲という広い土地で、友情のきずなで結びついている。各民族の子どもが一緒に遊んだり、お互いに勉強したり、助け合ったりして暮らしているのである。このように石森は、各民族の友情を表現し、民族協和の世界を描いている。この描写から見ると、石森は、平和で、差別のない、民族協和の世界を目指そうとしていたと考えられる。

作品の中には、幸福の法則、魂のあり方、新しい時代の女性の生き方、そして生き甲斐などの言葉があちこちに溢れている。しかし、民族協和に力点を入れたが、効果としては力点が入りすぎているようにも感じられる。

作品の中で、「生き甲斐」という題目の一節がある。その内容は、麻子と啓二をめぐって語られている。洋の姉の麻子は、婚約者が戦死した後、インテリ青年であった啓二と交際を始め、結婚することとなる。しかし、啓二は金のない支那人の病気を治してやりたいと一念発起し、上野博物館の仕事をやめ、北京で働くことを選び、そこで仕事のかたわら外科医の仕事を見習い、朝から晩まで支那人のことに熱中した。

麻子はこのときの啓二について、「シナ人の家にたのみこんで、そこでシナ人の習慣や風俗をすっかりおぼえこむつもりらしいわ。シナ語もどうやら使えるようになったって、よろこんだ手紙がきてよ。シナ人が自分の家に異国人を住まわせるなんて、いままでほとんどないらしいの」と言っている。また彼の様子は、「きまった収入などはないが、あちこちに日本語を教えては、いくらかお金がはいること、よぶんのお金があれば、まずしいシナの子どもたちに、メリケン粉を買ってあたえてしまうこと、四、五人のシナ人が、物

をもらおうとして、いつもうしろからついてくること、ときには、街道で、神の恩恵をといたりすると、信仰にめざめたシナ人が集まってくるので、シナ政府から誤解をうけて調べられたり、日本人からも白眼視されたり」[23] とも描かれている。

このように石森は、啓二が民族友好のために満洲の開発と発展に懸命に働く姿を描き出している。支那の子供たちに日本語を教える啓二は「すこしでも早く日本語をひろめよう」「ひとりでも早く、日本語がわかるように」[24] と努めている。そのために自分は、「一本のろうそくのつもりで生きていく」「からだを燃やしてそのほのおで、あたりを明るくしたい。それだけでも生きているかいがある。ほのおは、ただちに日本語となって、口をほどばしりでて、シナ人の心をあたため、まわりを明るくする、そうした暗い夜の道しるべになりたい」[25] と言うのである。

他方で麻子も、自分の生き甲斐を掴んでいる。彼女は、昔の蒙古人が「満人」を教化する歴史を思い出し、「一生の仕事」[26] という覚悟で、孤児になった中国人兄妹を自分と啓二の新家庭に引き入れて、愛情を一杯に注いでいる、彼女もまた、「生きていくということが自分だけのためではなく、こうして小さなふたりのために自分はたいせつなのだ。生きがいなどというものは、高い、遠いところにぶらさがっていて、自分どものようなものには、とどけないものだと思っていたが、いがいにも自分のすぐそばにあった」[27] と、啓二と同様の熱心さを示しているのである。

これらの人物の生き方は、満洲の地にあって、「日満」親善を望む石森の素朴な思いを示していると同時に、満洲における日本語の教育家としての彼の自覚を明確にしているものと思われる。しかし、中国人のために、懸命に働く日本人という構図には、日本人を中国人の救世主として、美化しすぎている傾向がみられる。彼は民族や人種や身分の差別がない世界の構築を目指そうとしており、日本人を批判してさえしているのは紛れもないことだが、やはり支配する側の日本人としての感覚から完全に脱することはできなかったのだろう。また、こうした描写は、当時の日中間における日本による支配や、中国人の置かれた厳しい境遇といった実態を考慮しておらず、理想主義的なものにすぎないという指摘は免れえないであろう。

この作品は、理想主義の面があるが、当時の満洲事情を知るための最好の素材であると思われる。例えば、大陸の花嫁、文化宣撫運動、国防婦人会な

ど、戦争時代あるいは植民地にしか見られない風景を、子どもの読者に伝えた。1940年『満洲年鑑』の「児童文学」の項目で、「石森延男氏は十四年春、力作『もんくふぉん』を満日紙上に連載、新しいスタイルによって大きな反響を呼んだが間もなく多年の功績を満洲文化史に残して離満東京へ去った」というように記している。満洲で過ごしてきた人たちに、石森の書かれた文学作品を愛読していた人は少なくない。「文部省に招かれて満洲を去る日の石森は、大連埠頭で大歓送を受けている。石森の満洲での仕事は大成功であったといえよう」という磯田一雄の評価もその例と思われる。

おわりに

「咲き出す少年群」における「五族協和」は、各民族が融和的に暮らしたり、お互いに優れた点を学び合ったり、お互いに助けたりすることと示している。また、石森は、しっかりと日本人を貶めること、また中国人やロシア人の子たちを褒めることから、石森は日本人として日本人をえこひいきしておらず、各民族の子どもたちを分け隔てなく同様にみなしていると分かる。

また、日本人の子どもは「支那語」を学ぶべきという批評も、更には石森が平和で、差別のない、民族協和の大同の世界を目指そうとしていたことの有力な論拠となりうると考えられる。日本語しか流通していないという設定は、当時の社会状況の反映であり、作者の差別的な視点に基づく描写ではない。

物語が書かれた時期に、中国全土では抗日運動が勃発していた。また、満洲の「五族協和」現状を押さえたことによって、実際の満洲国の状況が、指導民族としての日本民族の下で、他の民族も共存していること、そして、共存しても平等できなかったことがわかった。これらの創作の背後にある状況と対照すると、「咲き出す少年群」に描かれた「五族協和」像は理想主義的な性質を持っていると考えられる。作品において人々が安心して暮らしているという描写は、理想郷のような存在と見える。この作品だけでなく、その後の小説「日本に来て」、「スンガリーの朝」などの戦時下の作品でも、このような善良、純粋、勇敢、天真爛漫な子どもの世界が描かれている。

その理想主義の側面は、子どもの童心を守るための児童文学作品としての性質が成因になると思われるし、石森の一生を貫いた積極的な人生観、ヒューマニズムといった人間性にも関わったと考えられる。根本的に、石森には満洲の植民地としての本質や満洲国の実態についての認識が不足しており、

日本の満洲進入が支配や侵略に等しいという自覚に欠けていることが推測される。そこで、彼は努力して民族や人種や身分の差別がない世界の構築を目指そうとしており、または日本人を批判してさえしているのであるが、やはり支配する側の日本人としての感覚から完全に脱することはできなかったのであろう。

しかし、注目すべきは、石森が、五族協和を自分の個人理想とした試みである。彼は、満洲の土地にある各民族の人々がいかに幸福に生きていくか、どのように共栄共存すべきか、というような、民族と人間のあり方についてじっくりと考えていた。理想主義でありながらも、作品は当時の満洲に大きな影響を及ぼしたことは否定できない。彼の描く「理想の満洲」、「五族協和」理想は、一般の日本人の満洲イメージを代表するものとなった。このような意味で、石森の文学は、その限界を認識しながらではあるが、満洲児童文学史上重要な存在であるといえる。

注

[1] 川村湊『文学から見る満洲』、吉川弘文館、1998 年、pp.7-8

[2] 山中峰央「「満洲国」人口統計の推計」、東京経済大学会誌、第 245 号、2005 年、p.183

[3] 塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』、吉川弘文館、1998 年、pp.35-44

[4] 川村湊『文学から見る満洲』、吉川弘文館、1998 年、p.14

[5] 石森延男『咲きだす少年群』「はしがき」、新潮社、1939 年、p.1

[6] 石森延男『咲きだす少年群』「はしがき」、新潮社、1939 年、p.2

[7] 塚瀬進『満洲の日本人』、吉川弘文館、2004 年、p.176

[8] 塚瀬進『満洲の日本人』、吉川弘文館、2004 年、p.25

[9] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.95

[10] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.81

[11] 宝鉄梅「蒙疆政権樹立下の対モンゴル人日本語教育について」『現代社会文化研究』、新潟大学大学院、2004 年、p.80

[12] 寺前君子「満洲児童文学研究」、梅花女子大学大学院、博士学位請求論文、2013 年、p.201

[13] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.29

[14] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.17

[15] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.51

[16] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.91

[17] 前川康男「廷男童話が語ろうとしたもの」『学苑』、387 号、1972 年、p.43

[18] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.135

[19] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.76

[20] 森かをる「『咲きだす少年群』と『コタンの口笛』における＜日本語＞・＜種族＞」『名古屋近代文学研究』、15 号、名古屋近代文学研究会、1997 年、p.54

[21] 森かをる「『咲きだす少年群』と『コタンの口笛』における＜日本語＞・＜種族＞」『名古屋近代文学研究』、15 号、名古屋近代文学研究会、1997 年、p.57

[22] 塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』、吉川弘文館、1998 年、p.78

[23] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.55

[24] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.131

[25] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.138

[26] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.152

[27] 石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年、p.148

参考文献

石森延男『石森延男児童文学全集第 14 巻』、学習研究社、1971 年

川村湊『文学から見る満洲』、吉川弘文館、1998 年

塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』、吉川弘文館、1998 年

塚瀬進『満洲の日本人』、吉川弘文館、2004 年

寺前君子「満洲児童文学研究」、梅花女子大学大学院、博士学位請求論文、2013 年

宝鉄梅「蒙疆政権樹立下の対モンゴル人日本語教育について」『現代社会文化研究』、No. 31、新潟大学大学院、2004 年

前川康男「廷男童話が語ろうとしたもの」『学苑』、387 号、1972 年

森かをる「『咲きだす少年群』と『コタンの口笛』における＜日本語＞・＜種族＞」『名古屋近代文学研究』、15 号、名古屋近代文学研究会、1997 年

山中峰央「「満洲国」人口統計の推計」、『東京経済大学会誌』、第 245 号、2005 年